

Princess Princess

1

自分で言うのもなんだけど。

わたしは意外と結構モテる。

男の子からも、女の子にも。

わたしが何もしなくても、いつも勝手に輪ができていて、その中心は常にわたしだ。

だからこそなのだけど。

「あんた、今から私の『親友』ね」

堂々と真正面から宣言されたときには、すごく面食らってしまったのだ。

女の子というイキモノは、群れを作る習性がある。

それは教室っていうせまいオリの中で生き抜くために必要なスキルなのだけど。互いに守りあうっていうより、一人一人がぶつからないための同盟に近い関係。

「だからねえ、わたしたちのこれって、ほら、あれ、テレ

ビでよくやってるあの……」

「……（ずずっ）」

「ほら。ね。あの、ニュースで話題になるやつ」

「……首脳会談、とか？」

「そう。そういうのっ。さすがレタリン。もの知り」

「いや、今のはあんたがボケてただけだから。あ、あと『レタリン』いうな」

「ええー。ちがうよ。少ーし、出てこなかったただだよ。ボケてないよ。まだまだ若いよ」

「知ってる。てかなに？ またどうせ、教育番組かなんかの受け売りだろうけど」

「うん。昨日見たの。30分で名著『世界平和のために』」

わたしが胸を張ったら、向かいでなっちゃんサイダーずずずったレタリンが半眼になって。

『『永遠平和のために』』

「そうとも言う、かも？」

「そうとしか言わない」

「レタリンは、もの知りだねー」

「あんた、さつきからそればっか」

はあ、と一つため息吐いて、くいくいって手招きされたので、わたしが顔を寄せると、

「ペナルティ」

言って、レタりんはの人指し指が、わたしの唇にふれた。

そのままぷにぷにぐいぐいもてあそばれる。

ジト目のまま、レタりんはまた一つため息。

わたしの唇ぷにぷにぐいぐいしながら。

(……ほんと好きだよね)

何がいいのかわからないけど。

レタりんはわたしの唇をよくさわりたがる。

わたしの唇がおさしみのトロミたいにぷりっとしてて、

さわり心地がいいかららしいけど。

最初はなんか、「さわってもいい？」くらいに一回きいて

きてくれてたけど、最近だと今みたいにバツゲームぽいふ

んいきで、結構ようしやなくぐいぐいさわってくる。

それでもって、

「……なんか油っぽい」

(ポテト食べたからね)

ファミレスのクーポンあったし。

けどどこつちは何も言えないまま、レタりんの気がすむ

までぷにぷにされてる。

でも、そろそろいいかなーってくらいで、

「はむ」って。

レタりんの指を食べた。

そしたら、

「……」

また半眼でにらまれた。

まあでも、いつものごとくだし。

そのまま、はむはむ。

……ほんのり、おしぼりの味がする。

はむ、はむ。

「……そろそろ満足？」

「うん」

言ったら、すぽっと指が離れた。

これでおあいこ。

と思ったら、

(——うおおっ)

レタりん、その指自分でも一回はむとくわえて、

「……塩味」

「……ポテト食べたからね？」

答えてる間に、レタりんは何もなかったみたいに指をお

しぼりでふいた。

コヤツ、これを素でやるから、あなどれんわー。

いや、何をあなどるとかあなどらないとか別にないのだ

けど。

わたしの『親友』は何かと手強い。

2

レタりんもわたしと同じでクラスの人気者だ。

かわいくて、オシャレで、あいそもよくて、誰とでもへだてなく接する。

優等生。

のフリをしている影のがんばり屋さん。

しょうじき、スゴいなあ、と素直に思う。

だって中身はこんなにも正反対の性格なのだから。

目の前でまた混ぜてきたなっちゃんサイダー割りずずずってるレタりん見ながら思う。

このファミレスに入るときだって――。

「――またやってしまった……」

のぞいてみたら、待合の名簿にキレのいい角ばった字で「汐」って、書いてあったので、

「あれだね。やっぱりレタりんは心に男を飼っているね」
言ったら、にらまれたのでスマイルでスルーした。

そのあとレタりんはすぐ、ぐりぐりってボールペンでぬ

りつぶして、いつもの丸っこいひらがなで「うしお」って書き直した。

「……誰が見るかわからないから」

レタりんは、ほんとに気づかい屋さんのがんばり屋さん
だと思う。

To be continue...